

カエルの王さま、または、鉄のハインリヒ

KHM1 Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich

王女が金のマリで遊んでいて、そのマリを泉に落としてしまう。カエルが出てきて、王女の友達にしてくれることを条件に、マリを拾ってきてくれます。次の日、そのカエルが城にやって来て、約束を守ってくれるよう迫ります。嫌がる王女に父である王は、約束を守るよう命じられます。王女は嫌々カエルと一緒に食事をし、さて、一緒に寝ることになりました。仕方なく自分の部屋に連れて行くが、カエルがあまりにもあつかましいので怒って、力任せにカエルを壁に叩きつけてしまいます。するとそのとたんカエルは、美しい王子に変わりました。

ところで、王子にはハインリヒという忠実な家来がいました。王子が魔法にかかったとき、悲しさに心臓が張り裂けないようにと、心臓の周りに鉄の輪をはめていました。王子の魔法がとけたとき、ハインリヒの心臓の周りの鉄の輪も音をたてて割れました。二人はハインリヒの馬車に乗り、王子の国に行き幸せに暮らしました。



「メルヘン・ア・ラ・グリム」 古典的あるいはグリムのメルヒェン様式で、グリム・メルヒェンの初版から一番目に収められた。16世紀ころから語り継がれてきたドイツで一番古いお話である。

《グリム・メルヒェンの書き出しの決まり文句》

Es war einmal eine königstocher, ...

「むかしむかし、ひとりの王女がいました ...」